

言葉探し

瑞穂国

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

艦娘たちが辞書を読む鎮守府。

吹雪と司令官の、言葉と恋をめぐる、短いお話。

目次

「恋」	1
生誕―ある未来にて―	8

「恋」

——一つの言葉を、探しています。

「ん……ん……ん……」

わたしは「吹雪」という名前を与えられています。吹雪とは、強い風に煽られて、雪が舞い乱れる様子を表す言葉、だそうです。艦娘になって、わたしが初めて調べた言葉でもあります。

言葉というのは、実に複雑です。人の姿を得て、言葉というものを解するようになったとは言っても、艦娘であるわたしには、まだまだ慣れないことが多い。言葉は無数にあります。まだ知らない言葉があります。けど、星の数ほど膨大なそれらを、わたしたちはまだ、うまく使いこなせていません。

だから、艦娘はよく、辞書を引くんです。暇さえあれば辞書を読む。まだ知らない言葉を獲得するために。誰にも伝えられなかった感情を、いつか誰かに伝えられるように。

……そうは言っても、言葉の難しいところは、そこにあると言っても過言ではありません。特に感情を表す言葉は、尚更。辞書に乗っているのは言葉の定義だけで、わたしには結局、それがどういう感情なのかかわかりません。

まあでも、とにかく。言葉を知っているというのは大事なことだと思うのです。その時は理解できていなくても、ふとした時に理解できることがある。途端、それまで褪せた壁の向こうにあった言葉が、鮮やかな色に染め上げられていくんです。

ですから今日も、わたしは、辞書を引きます。鎮守府内に設けられた図書資料室。その傍ら、辞書コーナーとして設けられた場所には、艦娘たちの要望で集められた辞書たちが並んでいます。数も種類もいろいろです。中には古語辞典とか、大和言葉字引とか、外国語の辞書なんかも網羅されています。

そのうちの一つを、わたしは手に取っていました。普通の本より厚手の辞書は、想像以上にすんなりと本棚から抜けきます。その辞書を持って、机の並ぶスペースへ移動しました。

カーテンで遮られた秋の日が射す資料室。夏の残像を仄かに残した温もりが満ちる部屋。紙の香り、本の虫の匂い。茜の中でわたしは辞書を読み耽ります。

手にした辞書を、右端を目で追いながらめくっていきます。か行の後ろの方を開き、目当ての語句へ。目分量で開いたところは、少し後ろすぎました。「こさ」のページから前へ。「ここ」、「こく」、「こか」。「……あつた」

目当ての言葉は、「こ」の最初の方のページに載っていました。

言葉を見つけた時には、何ものにも代えがたい高揚感がします。言葉は宝石なんです。辞書という宝箱の中は、いつ見ても輝かしい宝珠で満ちています。

指でページをなぞります。言葉一つ、たった三行程度の説明文です。読むのに十秒もかかりません。

言葉の意味を噛み締めて、天井を仰ぎます。目を閉じて、少し時間をかけ、咀嚼するように。言葉は繊細で難しい。早とちりはよくない、ですから。それはいらぬ誤解を招くことになります。

ただ——今日に関しては、調べた言葉の意味が、わたしの中で消化しきれません。曖昧な話ですけど、言葉としての理解に、感覚としての理解が伴われていないんです。なんだかずれている。こういう感覚を、首をひねる、と言うんでしょうか。

「……うーん」

困ってあげた唸り声が、閑散とした資料室に響きました。夕食前のこの時間に、わざわざ資料室を訪れる艦娘はいません。今日に関しては、わたしがわざとそういう時間を選んだわけですけど。

「結局、どういうことなんだろう……」

調べた言葉は、ここ一週間ほど、ずっといろんな辞書で調べている言葉です。でも一向に、その意味は掴めません。何度読んでも、何度調べても、何度噛み締めても、言葉はわたしの中に入って来てくれないんです。

もはや唸るしかできないわたしは、ダメもとでもう一度、辞書の説明文をなぞります。

「吹雪?」

その時、わたしの名前を呼ぶ声がありました。辞書に集中していた私は、突然のことに肩を跳ねさせます。声の方を見ると、今ちようど資料室へ入ろうとしている、司令官が立っていました。抱えた段ボールの中身は、ここから持ち出した資料たちでしょうか。

「いいのかい?もうすぐ夕食だよ」

そう言いつつ、司令官は入り口側の本棚に、段ボールの中身を移していきます。いつもの癖で、わたしは立ち上がり、司令官の隣で本を戻すのを手伝います。ありがとう、と司令官は笑いました。

「吹雪は?また辞書を見てたのかな?」

「は、はい」

何気ない質問にぎくりとしてしまいます。机の上には辞書が開かれたままです。

「うん、いいことだ。言葉を知ること、世界を知ることだからね。君たちがいろんなことに興味を持つのは、とてもいい」

司令官の答えはいつも同じです。司令官は、わたしたちが言葉を知ることを、とても快く、肯定してくれます。それはいいことなのだと、受け入れてくれます。兵器として生まれたわたしたちに、人としての知識が備わることを、よしとしてくれます。だからこの艦娘は、皆辞書を読みます。

「今日は何を調べていたんだい?」

本を片付ける手を止めて、わたしはちらりと、机の方を見遣ります。自分の中で消化できない言葉。司令官に訊いてみるのは……一つ、いい方法かもしれません。司令官なら、言葉を理解するのに、いい手掛かりをくれるかもしれません。

でも……今日のこの件を司令官に尋ねるのは、なんだか躊躇されたんです。自分でもよくわかりません。だからこそ、この感覚のずれに、わたしは首を傾げています。

ううん、気のせいですが、きつと。わたしはいつもそうしているように、司令官に質問を投げかけます。

「司令官は、『恋』ってご存じですか?」

それが今日の、わたしの疑問です。ここのところ、ずっと理解しよう、調べ続けたものです。

この疑問に、司令官はどんな手掛かりをくれるのでしょうか。

わたしの質問を受けた司令官は、きよとんと、狐に摘ままれたような表情で、こちらを見ました。パチパチと瞬きをした司令官は、やがて小さな笑いを浮かべながらかぶりを振ります。

「ごめんごめん。ちょっと驚いてしまっただね。——そうか、吹雪は『恋』を調べてたんだね」

何かを納得したのでしようか、二、三と首肯する司令官。わたしにはその仕草の意味が分からず、やっぱり首を傾げてしまいます。

「はい。——誰かを好きになること。その人と、いつだって会いたい、一緒にいたいと思うこと。辞書には、そう書いてありました」

本を戻しながら、わたしは話を続けます。司令官も手を止めることはせず、頷きながら話を聞いてくれています。

「恋の定義は、わかりました。でも……うまく、掴めないんです」

ことりことり。本棚に本が収まる音の合間に、わたしの言葉と、司令官の相槌が混じります。

誰かを好きになる、ということ。恋の定義に大前提としてある感情については、理解できたつもりです。では、恋とは何ですか。好きとはどう違うんですか。好きな人には、恋をするんですか。

「司令官は、恋をしたことがありますか」

最後の一冊を仕舞い終わり、わたしは司令官の方へ向き直ります。段ボールを畳んだ司令官は、穏やかな夕陽の中で、こくりと一度頷きました。

「うん。随分と昔の思い出だけだね」

「どんな感情、なんですか」

「概ね、吹雪の言った通りかな」

答えた司令官は、腕組みをして考えています。言葉を選んでいるのだと、わたしは知っています。いつも慎重に、わたしたちの疑問に向き合ってくれているのだと。

「いつだって会いたい、いつだって一緒にいたい。うん、全くとってそ

の通りだと思う。——それはつまりね、どんな時でも、相手が心の片隅にいる、ということだと思うんだ」

司令官の言葉は、殊更ゆっくりです。わたしが言葉を噛み砕く時間を、待っていてくれます。

「心の片隅に、いつでも……」

「おいしいものを食べた時、きれいな景色を見た時、新しい発見をした時。そういうちよつとした幸せを、一緒に分かち合いたいと思えたなら、それは恋と呼んで差し支えないんじゃないかな」

司令官のヒントは、辞書よりかなり具体的で、でも決して、答えではありません。具体的な言葉を並べて、逆に答えを曖昧にしている、と言いますか。結局のところ、言葉を理解するのは、わたし自身です。あくまで司令官は、ヒントを出してくれるだけ。恋の答えは、わたしが出すものです。

ただ——もし、司令官のヒントの通りだとして。わたしの心の片隅には……わたしの好きな人が、いるのでしょうか。

例えば、間宮さんのカレーがおいしかった時。ホットケーキが上手く焼けた時。わたしは何を思ったのでしょうか。

例えば、夕焼けオレンジの海を見つめた時。雨上がりの水溜りに青空が映った時。わたしは何を思ったのでしょうか。

例えば、新しい言葉の意味を見つけた時。この世界の美しさを知った時。わたしは何を思ったのでしょうか。

わたしは——

「司令官」

廊下を歩く、わたしと司令官。陽はすでに沈んで、東の方から夜が訪れます。瞬く星々、白銀の月。青を下地にして黒を塗りたくった空のスクリーンに、太陽よりもずっと儂い光たちが並びます。ほんの一時、安らぎの時間。誰かと距離が近くなつて、誰かの温もりが近くなつて——そんな時間です。

「どうした？」

司令官はいつもと変わらず微笑みます。小首を傾げ、私の言葉を待っていました。

「わたしは——司令官のことを、尊敬しています」

それはいつも、わたしが司令官に言っている言葉です。尊敬、という言葉を使うのなら、きっと司令官が一番相応しい。わたしはそう思っています。

でも、今日は、もう一つ。

「司令官のことが、好きです。——多分、恋を、しています」

好き。そして、いまだ感覚の掴めない、恋。新しい言葉を、司令官と並べてみます。たったそれだけのことです。なのに何だか、胸の奥が熱くなつて、ほわほわします。せつかく色んな言葉を知っているも、喉が詰まりそうで、出てきてくれない。

ですから、二つ、新しい言葉を使うだけで精一杯でした。

「好き。恋、します」

司令官は、真ん丸に目を見開いていました。今まで見たこともない表情です。それは、多分、驚いているんだと、思います。

「——そっか。ありがとう」

何に対するお礼なのかはわかりませんでした。返す言葉が出てこなくて、わたしは頷く他ありませんでした。

「多分、ってことは、まだ確証はないんだね」

優しいいつもの声音に、頷きます。ようやく解消されつつある、喉の詰まり。なんとか口をこじ開けて、わたしは言葉を続けました。

「恋は、まだ、わかりません。でも、おいしいご飯も、きれいな景色も、新しい発見も——司令官と一緒に、いいんです」

この感情は、恋ですか。

いいえ、その質問は、わたしが、わたし自身にするものです。いつだって、言葉の意味と答え合わせは、自分でしなくてはいけません。それがいつになるのかは、今のところ、不明ですけれど。

「——ありがとう。そう思ってもらえて、光栄だ」

そう言った司令官が、ポンと、わたしの頭を撫でました。ほんの少しくすぐったい感覚。まだわずかに残る夕焼けのせいかな、司令官の頬は朱に染まっていました。そんな風に微笑む表情を、わたしは見たことがありません。

「私も吹雪が大好きだよ。どうかそれだけは、忘れないでおくれ」

司令官はそう言い残して、手を放しました。離れた温もりを、少し寂しく思うのは、訪れた夜のせいでしょうか。

誰かから言われた、初めての好き。司令官のそれは、恋なのでしょうか。そこを答えてくれなかったのは、きつとわたしが、まだ恋の意味を見つけていないから。

でも——今はそれで十分でした。

「——はいっ」

どういう訳か高まる鼓動をそのままに、わたしは力一杯返事をします。

司令官が、好き、と言ってくれたから。

わたしもあなたが好き。けれど恋かはわからない。

あなたと一緒にいたい。いつでもあなたに会いたい。湯気香る夕ご飯も、陽光輝く蒼海も、心躍動する言の葉も、全てあなたに伝えたい。

それを——この感情を、恋と、呼べたのなら。

わたしは、今度こそあなたに、恋をしよう。

生誕―ある未来にて―

「ねえ、吹雪。今日がなんの日か、知ってるかい？」

執務の合間、ふと司令官はそんなことを言いました。

秋晴れの空。執務室に差す昼前の光線。その中でこちらを見つめる司令官を、わたしは振り返ります。書き終わった書類に判を押しながら、司令官はいつも通りに、微笑んでいました。

「今日ですか？」

「そう、今日。十一月十五日」

言われて、わたしは頭の中の予定帳をめくりみます。秘書艦として、司令官の業務を補佐するようになって、半年ほど。艦隊の予定は、大抵、頭の中に入っています。

ですが、今日はこれといって、特筆することはなかったはずです。午後に本の納入があるくらいでしょうか。

それとも何か、会議とか、わたしが見落としていることがあるのでしょうか。

「いえ……今日は特に、何もありませんですけど……」

「そっかあ」

わたしの返答に、司令官は意味ありげな相槌を寄越します。

「何かありましたか？」

「ああ、うん、少しね。――ところで吹雪」

今度こそ、ペンを走らせる手を止めて、司令官はわたしを見ました。何か大事な話があるかを見て、わたしも書類整理の手を止めます。ニコニコと微笑んだ司令官は、ゆっくり口を開きました。

「今夜なんだけど。少し付き合ってもらってもいいかな」

「？はい、いいですけど……時間外業務ですか？」

秋刀魚漁支援と大規模攻勢前の準備で、書類の量はいつもの一・五倍くらいになっています。夜、わたしが業務を上がった時も、執務室に電気が灯っていることもあります。決まって、司令官が中で書類仕事をしていました。

今日もそうした類でしょうか。

「ああ、うん、そうじゃなくてね。たまには、一緒に外出しないかな？」
司令官の微笑は、少し照れたような、はにかみにかかります。

「いいレストランをね、予約したんだ。二人で」
それが……デートのお誘いなんだと、ようやくわかりました。

最近、少しずつ、わかっていたことではありませんけど。飄々として
いるように見えて、司令官は存外に照れ屋です。あまり自分の感情
を、表に出したがるらない性格。だから、こうして、時たま見せる本音
は、いつもはにかみと共にあります。

さっきの質問は、もしかして、わたしの予定を確認していたんで
しょうか。

「そう、ですね」

司令官が、急にわたしを誘った理由は、わかりません。それに、外
出で、いいレストラン、なんて。

心躍るのも、無理からぬこと、というものです。

「……いいお洋服、出しますね。司令官も、ばっちり決めてきてくださ
いよ」

作業に戻りながら、返事をします。「うん、わかった」という返事に、
自然と、わたしの頬が綻びました。

「いい場所、ですね」

大きな窓から見える海を眺めて、わたしは率直な感想を口にしま
す。

鎮守府からほど近い、海に浮かぶイタリアンのレストラン。運ばれ
てきたピッツアを取り分けつつ、わたしはずっと、窓の景色に心奪わ
れていました。緑と赤、船の航海灯が、夜の海に行き交っているの
です。

「気に入ってくれたようで、何よりだよ」

わたしを見つめる司令官は、嬉しそうににこにこしています。

ここのレストランのことは、実は少し前から、気になっていました。
何しろ、海に浮かぶレストランです。出撃する際に近くを航行するこ
ともあって、わたしの鎮守府で知らない艦娘はいません。

時折、香ばしいお料理の匂いが漂ってきたり、レストランの方が手を振ってくれたり。そんなこともありました。

「いつか来たいなって、思ってたんです」

わたしはそう言って、もう一切れ、ピッツアに手を付けます。焼き立ての生地を引き寄せると、まるで漫画で見たみたいに、チーズが伸びました。司令官と揃って、小さく笑います。

「すごく伸びますね」

「焼き立てだからね。どこまでも伸びるよ」

ピッツアを口に運びます。途端、香ばしい小麦とトマトの香りに、濃厚なチーズの香りが合わさって、鼻腔をくすぐります。何枚食べても、この香りだけで、胃袋が刺激されてなりません。我慢できずにかじると、やはり同じようにチーズが伸びて、慌ててからめ取りました。「んー、おいしい」

「ああ、うん、本当に、おいしい」

そういう司令官は、ピッツアを食べるわたしを眺めて、笑っているだけです。

きれいに半分ずつを平らげて、パスタがやって来るのを待ちます。ふと、司令官はわたしの服に目を遣りました。

「そのワンピース、お気に入りなんだね。似合ってるよ」

わたしが今日着ているのは、前に司令官に買ってもらった、お洒落なワンピースです。それから、髪にもアイロンを少し。海軍の正装で決めている司令官と、釣り合うようにと、短い時間ながら頑張ってお洒落をしたつもりです。

それを褒めてもらえるのは、悪い気はしません。なんとと言っても、司令官に見てもらいたくて、わたしはこの服を着てるんですから。

「はい。わたしの一番大切なもの、です」

とても恥ずかしいことを口にしてる気がします。でも、頬を染めて笑う司令官の表情を見ると、言葉にしてよかったなど、思うのです。

「それで、司令官」

運ばれてきたカルボナーラを巻き取りながら、わたしは疑問に思っていたことを、司令官に尋ねます。

「今日はどうして、急に外出なんて、言い出したんですか？」

金曜日とはいえ平日。いつも休日にデートのお誘いをしてくる司令官にしては、珍しいです。

「ほんとにわからない？」

「……はい」

ごまかしても仕方がないので、素直に答えます。午前中の司令官の言葉から考えれば、何か理由があつて、今日、わたしを誘ってくれていると思うのですが……。

わたしには、とんと、見当が付きません。さつきネットで調べたら、きもの日とか、昆布の日とか、そんな記念日は出てきましたけど。何か重大なことは、無いようでした。

「吹雪。今日は——君の、進水日じゃないか」

「——あつ」

言われて、初めて思い出しました。そう、そうです。今日、十一月十五日という日は、「吹雪」という駆逐艦が、進水した日です。軍艦としてのわたしが、初めてその身を海に浮かべた日です。

でも。それはそれで、また新しい疑問が。

「でも、あの……それで、なぜレストランに？」

「進水日って、誕生日みたいなものでしょう？ だったら、お祝いしないとね」

司令官の言葉に、うまく合点がいかず、わたしはさらに首を傾げてしまいます。

それは、船の進水というのは、必ずお祝いするものなのでしょうけど。でもそれは、あくまで進水したことをお祝いするのであって、進水日自体には何も意味がないはず。

「意味はあるよ」

わたしの考えを読んだように、司令官がぼそりと、それでいてはつきりと、そう言います。

「私はね、吹雪。君に会えたことが、この上なく嬉しいよ」

はたと、わたしはパスタを巻く手を止めます。司令官はいつものように笑って——でもいつもよりさらに、慈しむような目で、私を見て

います。

「艦娘が生まれたことに、意味はある。君たちが少女だったことに、理由はあるよ。だったら、一年に一度くらい、君たちが生まれてきたことを祝福する日が、あってもいいじゃないか。——ううん、絶対に、あるべきだよ」

……生まれてきたことを、祝福する日。

そんな日が、あってもいいのですか。それはわたしが、今まで知ろうともしなかったことです。

「産まれてくれたことに、感謝するよ。これからの道行きを、祝福するよ。幸多からんことを、願っているよ。——だから今日は、君の、記念日だ」

司令官はそう言つて、それまでよりさらに、笑みを深めます。

わたしの記念日。司令官の言葉を噛み締めます。いつものように、胸に手を当て、一言一言を噛み砕くように。言の葉をゆつくりと咀嚼するように。

「わたしの、記念日」

「そうそう。だから、ね。今日は、吹雪、君はゲストだよ。だからたくさん、わたしから祝われること」

口元を目一杯に引き伸ばして、最高の笑顔を見せた司令官は、そのまま巻き取ったペスカトーレを口にします。そうして、

「吹雪、こっちもおいしいよ」

と、お皿を差し出してきました。

一口分をフォークへ巻き付けて、口へ運びます。卵とチーズが濃厚だったカルボナーラ。それとは一味違う、爽やかなトマトの香り。微かに混じる潮の香り。それらを一緒に、楽しみます。

幸せの味が、した気がしました。今まで食べたものとは、全く違う。わたしへの、祝福の味。

ふと目を向けた厨房で、一人のシェフと目が合います。こちらの視線に気づいたのか、華麗にウインクを決めるシェフ。それから、親指をぐつと、こちらへ突き出します。

「——おいしいです。とってもおいしいです、司令官」

そう答えてから、わたしは入れ替わりに、自分のお皿を差し出します。半分ほどを食べたカルボナーラ。卵とチーズの絡んだスパゲツティに、グアンチャーレが彩を添えています。

「こっちもおいしいですよ」

「そう？じゃあ、いただきます」

今度は逆に、司令官が、わたしのカルボナーラへ手を伸ばします。

祝福の味。幸福の味。それがここにあるのなら。

祝福されたわたしから、ほんの少し、ささやかですけど、

「——ん、ほんとだ、すごくおいしい」

幸せのお裾分けです。